

ギョ! はっち魚ラボ 新聞

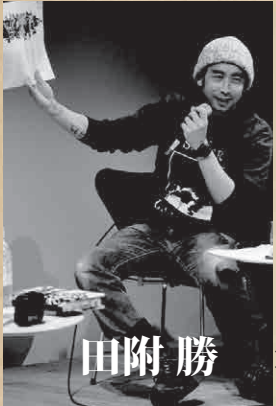


hacchi

たつき まさる
田附勝写真展

ぎょじん 魚人

アーティストトーク から



田附勝



赤坂憲雄

1974年富山県生まれ。1998年、フリーランスとして活動開始。同年、アート・トラックに出会い、9年間にわたり全国でトラックやドライバーの撮影を続け、2007年に写真集『DECOTORA』(リトルモア)を刊行。2011年には写真集『東北』(リトルモア)を刊行し、第37回(2011年度)木村伊兵衛写真賞を受賞。2013年『kuragari』(SUPER BOOKS)刊行。
http://tatsukimasaru.com/

民俗学者、学習院大学教授、福島県立博物館館長。1999年『東北学』を創刊。2007年『岡本太郎の見た日本』でドゥマゴ文学賞受賞、2008年同書で芸術選奨文部科学大臣賞受賞。2011年4月東日本大震災復興構想会議委員。

進行役：吉川由美
(はっち文化創造ディレクター)

吉川：「はっち魚ラボ」、8カ月間走ってまいりまして、この間、浜の皆さん、水産関係のみならずに出会うことができました。いつもは出会うことのない人たちがクロスする場からいろいろな発見があった8カ月間でした。

さて、東北は独特の気候風土の中で固有の文化を育んできたわけですが、現代の社会の中では均質化され見えにくくなっていきます。田附さんは私たちの暮らしの中から、今も息づいている人間が自然の中で生きる本質的な文化を切り取ることができると稀有な写真家です。田附さんは5月から毎月八戸に通い、おびたらしい数の写真を撮影しましたが、その中から160点を今回展示しました。

今日は、東北に光を当ててくださった民俗学者の赤坂憲雄さんをお迎えして、田附さんとの

トークを進行してまいりたいと思います。

田附：僕は、伝統行事や釜石の鹿猟とかを追いながら東北の原型とか、形を見ようと思っただけなんです。その感覚を言葉にしているのが赤坂先生だと感じていました。赤坂先生の文章を覆すことが僕の写真家としての使命だと思って、2011年の2月まで6年間にわたり東北各地の写真を撮りました。写真集にしようという時に震災が起こりました。そんな忙しい時に会ってくださるかどうかわからなかったけども、僕は手紙を書きました。

赤坂：送られてきた東北の写真は血まみれなんです、鹿の血があつたり。彼と編集者が研究室にやってきました。僕は彼の顔を一目見たら、あ、こいつはいいって、好きになっちゃいました。

そして、自粛、自粛で、東北の人たちが何か耐えることを強いられていた時だったからこそ、彼の写真集「東北」は、出す意味があると僕は思いました。僕は東北学ということで20年ぐらいずっと東北を歩いて、八戸も少しだけ歩いていますが、言葉にできることって限られているんですよ。田附さんの写真見た時に、ちよつと不意打ちを食らわされた気がしました。自分は東北、東北ってたくさん言葉紡ぎ出してきたけれども、でっかいメカジキ抱えている漁師の写真の、彼の目つきとか、そういうものをうまく言

葉で表現できてなかったと。ずっと東北って去勢されてきたんじゃないかって思っています。東北が持っているギラギラした力や何か混沌としたものは、無口でお人よしで我慢強いみたいところにずっと追い込まれてきました。ところが、そうではない東北が彼の写真にはあると思いました。そこに感動



せて良かったなと思います。田附：僕は6年回っている間に強い東北を見た。太古の存在はもう見えないところにあるんだけど、その見えない姿が、今でもどこに残っている、本来必ず持つてなければ人間が生きられないものを持つているように見えた。

田附：「お前は俺の何がわかってるんだと呟く声がする」赤坂：お前ら、東北の何がわかってるというんだ、と。こんな時にこんな写真集出していいのかという議論の中、あの時に出

赤坂：これまで田附さんは1日に何回もシャッターを押さないような作品の作り込み方をしてきたと思います。今回は現場で何万枚も撮っている。これまでの田附さんの世界とはまったく違う世界に入っているなあと感じました。ただ、やっぱり真っ直ぐなんですかね、この男は。自分の知りたいことを、撮りたいことを撮りたいんですよ。実にわがまま。でも愛されてるみたいですね。

田附：大喜でイソクサとりをしていた高橋ミ子さんとその姉妹と5月に浜で出会い、そこからがミ子さんたちの始まりです。

まず、ミ子さんに、去年亡くなった南浜漁協の石井組合長さんに許可を取ってもらいたいと言われました。彼は種差海岸南

側のエリアを守っていた。浜は、自分たちの漁業をやる場でもあり、景観でもあるし、その営みでもあるし、子どもたちの教育の場でもある。要は簡単に来て、すべてを荒らしていくような、それは写真じゃなくてもだと思っただけでも、そういうことをわかっていくことの許可だと思っ。

その石井さんが、苦笑までではないんだけど、少し笑顔になって「いいよ、お前撮っていいから」って言ってくれたのね。僕が今回のプロジェクトで一番の心残り、その時になぜ石井さんの顔を撮れなかったのかということ。

吉川：ミ子さんに会えなかったら、石井さんとの出会いも一連の写真もありませんでした。田附：海で魚を獲るといふ姿も大事なんだけど、でも、みんながどのように台所にいるのか、台所の風景がどういう姿なのかすごく知りました。

(客席の)高橋ミ子さん・ウチのお皿や食材が写真になってるんですよ。恥ずかしい(笑)。

田附：台所の断片というか、お盆が並んでいることで、その生活の姿、彼らの営み、浜の姿が確実に見えるというふうに俺は思っていて、そこを本当にミ子さん、高橋家ほかを含め、皆さんが許可してくれたのは、すごい理解だなという気がする。

吉川：田附さんは、今までと今回と違ったことってありますか？

市からの依頼の仕事っていうこと

田附：震災前から東北を撮っている時は、東北ってものの、みんなが大きいところを真切っているところを撮っているって、流し気持ちはあって、流動的に流されるままに撮影した。それが結果的に、今回こういう写真の撮り方になったし、何気ないものを撮っていて、それを作品として発表できるものになった気がする。

今回は、八戸市からの依頼の仕事っていうこと



ともあるんだけど、僕も実際させてもらおうという気持ちがあるって、流動的に流されるままに撮影した。それが結果的に、今回こういう写真の撮り方になったし、何気ないものを撮っていて、それを作品として発表できるものになった気がする。

赤坂：震災後、南三陸町の水戸辺という、漁村なのに鹿子踊りを伝えている集落でお話を伺っていたら、水戸辺の男たちは昭和30年代までは海で働いていないことがわかった。炭焼きをしていたそうです。つまり海山の間に暮らしているんです。だから炭がすごく値が高い時代は男衆はみんな山に入っていて、炭を焼いて稼いでいた。炭が売れ

楽園のように感じたんです。今は貨幣経済でお金を稼がなきゃいけないってことはあるけれど、畑の仕事をしながら、海を臨めるし、夜になれば星がすごいきれいだし、その畑で採れたものを物々交換し、夫が漁師だったら魚も交換する。

何かそんなの見ちゃうと、自分のメッセージを打ち出すことよりも勝手にその土地からメッセージが伝えられているものを、俺は素直に撮ってくれば良いんじゃないのかと思つた。それが八戸の沿岸部の営みであるというふうには僕は感じたから、だから僕はそういうふうにならざるを得ないままに撮れば良いなと思ってた。

赤坂：僕は、コミュニティは八戸の漁村に生きていて、それこそが、これからの時代を支えていく力になるというふうに感じています。田附さんの「魚人」の写真集が出来た時にはそういう圧倒的な豊かさ、生き物の激しい生きものとか、そういうものとか、向かい合いな

吉川：展示会場では、魚がすごい大きくて、人がすごく小さかったりして、魚の方が圧倒的に力があるイメージを持ちます。田附さんは今回、海の上で何を思っているのか、見てきたのでしょうか？

たんだというふうな思つたわけ。今回も魚について、そう思えるのか思えないのかという挑戦でもあったわけ。

赤坂：僕は、コミュニティは八戸の漁村に生きていて、それこそが、これからの時代を支えていく力になるというふうに感じています。田附さんの「魚人」の写真集が出来た時にはそういう圧倒的な豊かさ、生き物の激しい生きものとか、そういうものとか、向かい合いな

吉川：普遍的なことをこの東北から語ることこそが、世界の人の心に届くし、そのフィードバックがこの東北の価値を外から認めてもらうことになる。田附さんの写真を見て、歴史に残る素晴らしい写真が誕生している瞬間に立ち会っているんじゃないかと確信しています。

戸の漁村の姿は、ある種の物言わぬメッセージになるでしょう。すごく強い写真として受け取られるんじゃないかなと思えますね。東北に生き続ける人たちは、自分たちがそこでどう暮らしているのか、もう一度ひとつひとつ掘り起こし、再現し、あるいは受け継いでいくための営みを始めなくてはいいじゃないか。だから彼が、八戸に入ってきたという仕事をしてくれたいということはとても励ましくなりますね。きつといい写真集になる。彼にしかできない写真集になるんじゃないかなと思つています。

この後も田附さんは通い続け

吉川：普遍的なことをこの東北から語ることこそが、世界の人の心に届くし、そのフィードバックがこの東北の価値を外から認めてもらうことになる。田附さんの写真を見て、歴史に残る素晴らしい写真が誕生している瞬間に立ち会っているんじゃないかと確信しています。

て、高橋家の皆さん、その他の多くの皆さんといろいろなまた違う出会いがあると思うんですけど、またそこから私たちがの本当は毎日のように見ているのを見ていないことを強いメッセージとして伝えてくれるんじゃないかなと思います。

田附勝という存在が何よりも浜を活気付けていると思います。

この田附さんの写真を、はっちから世界に発信できたことは、本当に誇りたいし、多くの人が衝撃をもってこの作品を捉えてくれるだろうとだろいう信じています。とにかく浜の人たちが喜んでくれて、何回も見た写真だと言ってくれている。勝ちゃん、また来てねと言ってください。

